

俳句講座

生きがい

十七文字に求める

吉川翠風



著者略歴

吉川翠風

本名：利雄 雅号：利洲・翠石

茶名：宗隆

昭和23年：国立東京農工大学卒

大磯町教育委員・日本植物研究会員・園芸研究家・みどり主宰・県文芸懇話会々員・俳人協会々員・俳句教室講師・嵯峨野・鷗立庵同人・県実行会々員・書道教授・書道奨励協会々員・書道芳友会々員・県筆友書道連盟同人・書道雅遊会同人・県ペンクラブ会員・かながわ風土記俳壇選者

主要著書：『一木一草の記』・『相模野植物記』・『続相模野植物記』・『かながわの植物』・『大磯鷹取山の植物』・『万葉草木譜』・『続万葉草木譜』・『長寿の里二宮町吾妻山公園植物散歩』・『野の花逍遙』・『木の花漫步』・『草木有情』・『草木散策記』・『野菜の文化史』・『家庭菜園入門』・『みぢかにある有毒植物』・『食べられる身近な山野草』・『身近にある薬用植物』・『句集石蓐の花』・『句集相模野』・『句集踏青』・『句集光芒』・『俳句入門俳句を楽しむ』・『草木徒然記』・『大磯鷗立庵の植物』・『句集草木との対話』・『翠風の俳句教室』・『佳句500選』・『横の人生を楽しむ筆のあそび』・『詩のあそび』・『萬葉の植物文学散歩』ほか

その他：『かながわ風土記』・『タウンニュース誌』・『湘南鎌倉吟行案内』・『ふるさと大歳時記』などに執筆

現住所：〒259-01 神奈川県中郡大磯町生沢1176

☎ 0463 (72) 0317

生きがいを十七文字に求める		平成五年十月 第一刷	定価 一、八〇〇円 (本体価格一、七四六円)	著者 吉川 翠風	発行者 上田 昭男	発印行刷 (株) オフィス・ユイ
〒247 横浜市栄区上郷町 一七〇七一二		☎ 〇四五(八九二)六四一四				

TOSHIO YOSHIKAWA PRINTED IN JAPAN

0063-9310-7914

俳句講座

生きがい

を

十七文字に求める

はじめに

俳句を作ってみたという声は、よく耳にします。

現代は、どういう時代かと考えてみますと、平和で、何不自由なく暮らしていると、思っておられる方が、大部分ではないでしょうか。

そして、なにか文化的なものを、生活の中にとりいれ、少しでも気持よく、悔なく愉快に、張りのある人生を送りたいと、思っておられるのではないかと、思います。

俳句は、日本の美しい四季、自然風土と^{ことだま}言霊の幸^{さきわ}う国といわれるほどの、豊かな言葉を土壌に生れ育ってきました。日本という自然、風土、生活の中から生れるべくして、生れ出た文芸といえると思います。

人さまざま、それぞれの生き方をするより仕方がないのですが、誰しも幸福を求め、心の虚^{むな}しさを埋めるものを求めます。

そこで、この求めをみたす一つの方法として、俳句を学び、俳句を作ることをおすすめします。あまりむずかしく考えずに、一日一句を目標に、句作してみて下さい。そのうちに、俳句を作ることが楽しくなり、本当の自分が、こんなところにあったのか、と、大きな驚きと感激を抱かれると思います。

そして、あなたの人生に、俳句がなくてはならないものになります。さあ、明日といわず、今日から俳句を作ってみましょう。

あなたの生がいとしての、よい俳句を作るためには、俳句というものを、真に理解しなければなりません。

そこで、句作の基礎基本となる事項と投句されたものを鑑賞・添削したものの、ならびに筆者の作品を掲載させていただきましたので、これらを熟読玩味していただき、本書が俳句を楽しみ、俳句を作る皆様のよき伴侶として役立てていただけたら幸いです。

平成五年佳日

著者

目次

俳句講座 生きがいをも十七文字に求める

はじめに	3
一、俳句を作る創造の喜び	6
二、俳句は十七文字(音)の詩である	8
三、季題を詠みこむ	10
四、切字は感動の詞である	16
五、俳句作りのポイント	17
六、佳句を生む為の心得	20
七、俳句は人生行路の文学的足跡である	42
八、投句の鑑賞と添削	43
九、投句の佳句鑑賞	150
十、吉川翠風の俳句	187
おわりに	226

一、俳句を作る創造の喜び

俳句を作ることは楽しいものです。

俳句を作ることの楽しさ、喜びとは、どういうことなのでしょう。花が咲いた、鳥が鳴いた、月が美しいといった自然の風物を、十七字に纏め上げて作ることでしょうか。いわゆる花鳥風月を友とする楽しみでしょうか、俳句がそういう風流閑雅の楽しみであった時代もありました。しかし、今日、俳句の楽しみは、それとは違って来ています。自分の詩を詠むということ、日々の生活の詩を作るということ、自分の詩を作り出すという喜びであります。これが今日の俳句の特色になりつつあります。

俳句の形は、十七字という小さな形ですが、その小さな形なるが故に、広い現わし方もむずかしく、小形だけに容易ではない点があるからです。十七字と

いう小さい世界に、どのように自分の感じた詩を言い現わすか、そこに苦心が
いるのです。その苦心をいとわず乗り越えて、一句を作り出した時の喜びは、
句作の苦しさを忘れさせ、創造そうぞうの喜びを与えてくれます。

もともと俳句は、作・る・も・の・で・は・な・く・生・ま・れ・る・も・の・だ・と・も・い・わ・れ・て・い・ま・す。心
に浮んだ詩想を間髪かんぱつを入れぬ心の働きの十七字におさめるのです。

そこで俳句を作るには、まず俳句に馴れることが、もっとも大切です。俳句
に馴れるとは、俳句の形や約束をよく知ることです。

二、俳句は十七文字(音)の詩である

俳句は十七字で成立っています。

十七字ということは、仮名で書いた場合のことで、漢字が混ざればもっと短くなりますから、十七字というよりは、十七音というのが正しいといわれています。

十七音という詩の形式は、最も小さな詩形です。俳句の形を最短詩形というのは、そのためであるといわれています。詩形が小さければ、それだけ表現がむずかしくなります。表現がむずかしいなかで、自由に自分の感じた詩を詠む詩形の小さい框わくの中に自由に遊ぶということが、実に楽しいということになるのです。

俳句の十七音の詩形は、連歌や連句の第一句(発句)が切り離されて、詩の

形となったものです。この十七音は、上・中・下の三段に分かれ、五・七・五の形をとっています。

松尾芭蕉の「古池や蛙飛びこむ水の音」の有名な句は、このよい例です。

俳句は、詩ですから韻文です。韻文というのは、韻律をととのえた文の意味で、文語体が好ましいとされています。一部の作家に、現代の口語体を主張する人もいますが、詩歌の表現様式は、文語体の方が心に訴える力が強く、俳句のような小さな詩形には、適していると思います。

三、 季題を詠みこむ

俳句には、季題というものがあります。季題とは、季節の題目、季節の詞ことば（言葉）の意味です。俳句が十七音の形式で、季題を詠み込むということは、俳句を支える大きな柱です。

俳句が季題を詠む約束は、連歌や連句の発句が持っていたものを受け継いだものです。俳句の季題の約束は、わが国における四季の変化が豊かであるからともいえますが、それだけではないようにも思われます。

俳句における季題きだいは、約束であります。この季題を十七字の中に詠みこむことが、伝統的な型なのです。

俳句の季題は、「俳句歳時記さいじき」や「季寄せ」と題する本に纏まとめられているので、それらをたえず座右に置いて参考にしていただきたいと思います。なお現

次に季題の例を少々挙げて見ますと、次のようなものがあります。

元日 がんじつ
初日 はつひ
淑氣 しゅくき
門松 かどまつ
年賀状 ねんがじょう
御慶 ぎょけい
門松 かどまつ
双六 すごろく
羽子板 はこいた
新年会 しんねんかい

謡初うたいぞめ
初句会はつくかい
箱根駅伝はこねえきでん

○ 春の部

立春 はるあき 春浅し さへかえ 冴返る よかん 余寒 はる 春めく はる 春 啓蟄 けいちつ 彼岸 ひがん 春曉 しゅんぎょう 春昼 しゅんちゅう
 春の夜 はるよる 暖か あたた 麗か うらら 長閑 のどか 日永 ひなが 遅日 ちじつ 花冷 はなびえ 春深し はるか 春光 しゅんこう 春の空 はるそら
 春の雲 はるくも 春の月 はるつき 涅槃西風 ねはんにし 東風 こち 春一番 はるいちばん 風光る かぜひか 春疾風 はるはやて 菜種梅雨 なたねづゆ
 春雨 はるさめ 淡雪 あわゆき 斑雪 はだれ 春の山 はるやま 春の水 はるみづ 春潮 しゅんちよう 春田 はるた 山笑う やまわら 春泥 しゅんでい 逃水 にげみず
 残雪 ざんせつ 春出水 はるでみず 雪崩 なだれ 薄氷 うすらい 春衣 はるころも 春袷 はるあわせ 木の芽漬 このめづけ 桜餅 さくらもち 春燈 しゅんとう 春炬燵 はるこたつ
 野焼 のやき 田打 たうち 植木市 うえきいち 茶摘 ちやつみ 汐干狩 しおひがり 遠足 えんそく 踏青 とうせい 野遊 のあそび 摘草 つみくさ 菊根分 きくねわけ
 嫁菜飯 よめなめし 蜆汁 しじみじる 花見 はなみ 花筵 はなむしろ 風車 たこ 春の夢 はるゆめ 風車 かざぐるま ぶらんこ しゅんみん 春眠 しゅんみん 春愁 しゅんしゅう
 卒業 そつぎょう 入学 にゅうがく 初午 はつうま 針供養 はりくよう 雛祭 ひなまつり 春場所 はるばしよ 遍路 へんろ 花祭 はなまつり 涅槃絵 ねはんえ 仏生会 ぶつしょうえ
 若駒 わかこま 猫の恋 ねここい 蛙 かわず 雲雀 ひばり 鶯 うぐいす 帰雁 きがん 鳥雲に入る とりくも 囀 さえずり 桜鯛 さくらだい 百千鳥 ももちどり 白魚 しろうお
 若鮎 わかあゆ 桜貝 さくらがい 梅椿 うめつばき 桜花 さくら 遅桜 おそざくら 辛夷 しんぎようけ 沈丁花 れんぎよう 連翹 れんぎよう 木の芽 ねこやなぎ 猫柳 ねこやなぎ
 柳絮 りゅうじょ 竹の秋 たけあき 諸喝采 しよかつさい 菜の花 なはな 春の草 はるくさ 葦 すみれ 蒲公英 たんぽぽ 土筆 つくし 紫萼 はこべ 桜草 さくらそう
 芹 せり 茅花 もはな 一人静 ひとりしずか 蓬 よもぎ 春蘭 しゅんらん 蘆の角 あしつの 蔞 ふき 蔞 とう

○夏の部

初夏 しよか	夏 なつ	夏めく	夏浅し なつあさ	麦の秋 むぎあき	半夏生 はんげしやう	短夜 みじかよ	炎昼 えんちゆう	暑 あつ	大暑 たいしよ	灼くる や
涼 すず	夏の果 なつはて	秋近し あきちか	夜の秋 よるあき	夏の月 なつつき	梅雨空 つゆぞら	南風 みなみ	青嵐 あおあらし	夕嵐 ゆうなぎ		
卯の花腐し はなくた	雷 かみなり	虹 にじ	五月闇 さつきやみ	夕焼 ゆうやけ	西日 にしび	旱 ひでり	夏野 なつのあわせ	裕セル あうりん	単衣 ひとえ	羅 うすもの
浴衣 ゆかた	新茶 しんちゃ	青簾 あおすだれ	心太 こころでん	網戸 あみど	夏座敷 なつざしき	虫干 むしほし	行水 ぎようずい	風鈴 ふうりん	田植 たうえ	早乙女 さおとめ
藻刈 もがり	鵜飼 うかい	魚漿 うなぎ	避暑 ひしょ	納涼 すずみ	西瓜割 すいかわり	水中花 すいちゆうか	金魚玉 きんぎょだま	螢 ほたるがり	端居 はし	
日焼 ひやけ	登山 とざん	蚊遣火 かやりび	天瓜粉 てんかふん	噴水 ふんすい	団扇 うちわ	虫干 むしほし	夏越 なごし	祇園会 ぎおんえ	河鹿 かじか	
時鳥 ほととぎす	翡翠 かわせみ	鮎 あゆ	初鯉 はつがとお	蛾 が	螢 ほたる	蟬 せみ	空蟬 うつせみ	葉桜 はぎくら	牡丹 ぼたん	繡毬花 てまりばな
夏木立 なつこたち	若葉 わかば	万緑 ばんりよく	木下闇 このしたやみ	緑陰 りよくいん	病葉 わくらば	卵の花 うのはな	合歡 あひむ	花 はな	玫瑰 はまなす	
竹落葉 たけおちば	向日葵 ひまわり	月下美人 げっかびじん	たけのこ	草 くさ	いさ	青蘆 あおあし	夏草 なつくさ	蒨 ふき	沢瀉 おもたか	夏薊 なつあざみ
十葉 じふやく	姫女苑 ひめじょおん									

○ 秋の部

立秋 りつしゅう 残暑 ざんしゅ 新涼 しんりょう 秋めく あき 秋の暮 あきのくれ 夜長 よなが 秋澄む あきす 爽か さわや 罇雲 いわずくも 月待宵 つきまちよ
 名月 めいげつ 霧 きり 秋深し あきふか 冷まじ すさ 後の月 あとのつき 十六夜 いざよい 大西風 おおにし 初嵐 はつあらし 野分 のわき 夕月夜 ゆうつきよ
 露 つゆ 露時雨 つゆしぐれ 秋の雷 あきらい 花野 はなの 山粧う やまよそお 秋の水 あきみづ 落し水 おとしみづ 釣瓶落し つるべおとし 菊脛 きくはます
 新蕎麦 しんそば 濁酒 にごりざけ 零余子飯 むかこめし 行水名残 ぎょうすいなごり 燈籠 とうろう 風炉名残 ふうろなごり 菊枕 きくまくら 松手入 まつていれ 鳴子 なるこ
 砧 きぬた 稻架 はさ 竹伐る たけき 萩刈る はぎか 月見 つきみ 虫籠 むしかご 秋思 しゅうし 運動会 うんどうかい 夜学 やがく 囀 おどり 紅葉狩 もみじがり
 重陽 ちゅうよう 盆用意 ぼんようい 文化の日 ぶんかひ 七夕 たなばた 星合 ほしあい 盆 ぼん 生御魂 いきみたま 迎火 むかえび 施餓鬼 せがき 送り火 おくび
 踊 おどり 秋遍路 あきへんろ 定家忌 ていかき 雁 かり 鹿 しか 渡り鳥 わたりどり 色鳥 いろどり 稻雀 いなすずめ 鴝 もず 啄木鳥 きつつき 鳴 しぎ
 鶴来る つるきた 落鮎 おちあゆ 秋刀魚 さんま 秋の蝶 あきちようひぐらし 蛸 とんぼ 蜻蛉 せみ 虫 むし 蟋蟀 こおろぎ 鈴虫 すずむし 邯鄲 かんだん 草雲雀 くさひばり
 蝨斯 きりぎりす 鮭 さけ 木槿 むくげ 芙蓉 ふよう 木犀 もくせい 梨 なし 柿 かき 栗 くり 柚子 ゆず 楓 かえで 紅葉 もみじ 新松子 しんちご
 木の実 このみ 芭蕉 ばしゅう 朝顔 あさがお 鶏頭 けいとう 菊芋 きくいも 稻 いね 蕎麦の花 そばはな 敗荷 やればす 末枯 うしかれ 郁子 ひべ
 萩 はぎ 葛の花 くずはな 女郎花 おみなえし 蓼の花 たてはな 茸 きのこ

○冬の部

初冬 はつふゆ 冬ざれ ふゆ 小春 こはる 年の暮 とし 冬至 とうじ 短日 たんじつ 寒の内 かんうち 冷し つめた 牙ゆる き 初雪 はつゆき 風花 かざはな
 三寒四温 さんさんよんおん 冬晴 ふゆはれ 冬の月 かんづきはる こがらし 北風 きた 時雨 ときり 霰 あられ 虎落笛 もがりぶえ 氷 はつゆき 氷柱 つらら
 かみわた 神渡し 空風 からかぜ 枯野 かわの やまねむ 山眠る 冬田 ふゆた 寒の水 かん みず 水涵る みずか 霜柱 しもばしら こおり 氷柱 つらら
 蒲団 ふとん セーター 襟巻 えりまき 荃漬 くきづけ 雜炊 ぞうじ 燕汁 かんざしる 菓喰 くりぐい 湯豆腐 ゆどうふ 煮凝 にこり 寒卵 かんたまご
 ふゆざしき 冬座敷 隙間風 隙子 しょうじ 炭火 すみび 炬燵 こたつ 火吹竹 ひふきたけ 温石 おんじやく 猪狩 しがり 焚火 たきび
 たんばい 探梅 息白し しゃくしろ 社会鍋 としわすれ 年忘 とし 年の市 いち 恵比寿講 えびすこう 神迎え かみむかえ 芭蕉忌 ばしやう忌 一茶忌 いっさき
 蕪村忌 ばんそんき 笛鳴 ささなき 寒鴉 かんがらす 水鳥 みずとり 千鳥 ちどり 鳩 かいつぶり 寒鰯 かんばな 寒鮒 かんばな 綿虫 わたむし 早梅 そうばい 寒椿 かんつばき
 まんりやう 万両 木の葉 は おちば 落葉 ふゆこだち 冬木立 水仙 すいせん 葉牡丹 はぼたん 蕪 かぶ 枯尾花 かれおばな 枯葎 かれむくら 山茶花 さざんか